



21世紀の エネルギーを 考える会・みえ

会報 第22号
平成19年3月22日発行

【主な加盟団体】
■三重県商工会議所連合会
■三重県商工会連合会
■三重県中小企業団体中央会
■三重県経営者協会
■三重県愛媛連絡会

CONTENTS

巻頭言	2
講演録	2～4
エネルギー点描	5
投稿・見学会記	6
活動報告・役員一覧	7
編集後記	8





会長 小菅 弘正

わが国の経済は、景気拡大期間が高度経済成長期の「いざなぎ景気」を超え、緩やかながら着実に回復しております。

特に、中部地域においては、自動車を中心とした製造業の中枢圏域として強みを生かし堅調に推移しております。

この経済を支えるのがエネルギー資源であります。わが国はエネルギー資源に乏しく、石油をはじめとする化

石燃料の価格高騰や需給のタイト化によってエネルギーセキュリティの重要性がますます高まっています。

また、化石燃料の利用により二酸化炭素の排出量が増加し、地球温暖化による異常気象などが懸念されております。

このため地球温暖化防止の観点から二酸化炭素をはじめとする温室効果ガス排出量の削減が世界的に重要な課題となっています。

この温室効果ガス削減に向け、国や企業をはじめとし、私たちひとり一人が様々な取り組みを行っていかねればなりません。

三重県内においては、風力発電、廃棄物発電の導入や燃料電池の研究開発など新エネルギーの導入が積極的に進められています。

しかしながら、これら新エネルギーは、環境負荷が少ないクリーンなエネルギーである一方で、出力の不安定や高い

コスト等の課題を抱えており、エネルギーの主力として利用することは、難しいのが現状です。

このことから、発電過程において温室効果ガスを排出せず、今後のエネルギーの主力となりうるのが原子力発電であり、地球温暖化防止の打開策としても推進することが重要であります。

昨年国が策定した「原子力立国計画」では、国策として原子燃料サイクルを含めた原子力発電を推進していく方針が明確に示されております。

当会としては、次代を担う子供たちのため、「環境と調和したエネルギー源の確保」を訴えていくとともに、この三重の地から新エネルギーや原子力の理解を深めるため、引き続き情報発信を行ってまいりたいと思います。

今後とも、会員の皆さまのご支援とご協力をいただくよう切にお願い申し上げます。

講演録

平成18年度 省資源・省エネルギー大会が開催「リサイクルから生み出す資源」

主催 | 三重県新生活運動推進協議会

後援 | 21世紀のエネルギーを考える会・みえ

平成18年度 省資源・省エネルギー大会が2月20日(火)津市ポルタひさいふれあいセンター多目的研修室で開催されました。

主催の三重県新生活運動推進協議会の伊藤幸子会長は「全国生活学校連絡会の会合では、省資源に関してマイバッグ持参運動を進めていくことが決議されました。レジ袋は1枚作るのに石油が約20cc必要になるとのことです。全国では305億枚使われており、そのうちの約300万枚が捨てられている。石油に換算すると200リットルのドラム缶を300万缶使うことになるそうです。石油は現在の状況と同じように使っていると約40年でなくなります。日本のエネルギーはどうなるのでしょうか。新エネルギー、安全さえ確認できれば原子力も必要になるのではと思っており、今後どのような方向に進んでいかなければならないかを一緒に考えていきたいと思います。」と挨拶しました。

また、来賓の21世紀のエネルギーを考える会・みえ中村信夫事務局長からは、「CO₂を排出し地球温暖化が進むことは南極の氷が溶け出し陸地が狭くなるといった大規模な問題だけでなく、私たちの生活にも影響を及ぼします。原油が高騰していますが、日本の石油は今後40年くらいでなくなると言われており、石油をもっと有効に使い、省資源を心がけて



いっていただきたい。」との話がありました。

続いて株式会社日本総合研究所研究員三輪泰史氏の「リサイクルのウソ・ホント～ゴミがリサイクルされるまでの裏側」と題した講演がありました。三輪氏は、Reduce(ごみの減量)、Reuse(再使用)、Recycle(再生利用)といったリサイクルの3Rの重要性を説明した上で、PETボトルやアルミ・スチール缶、ガラスびんなどがどのような流れでリサイクルされるかを説明しました。また、リサイクル生み出す新たなエコエネルギーの例として、廃食油のバイオディーゼル化、生ゴミ・畜産廃棄物のバイオガス化などを挙げ、実際にどのように生まれ変わっているかを説明し「望ましいリサイクル

は“省資源効果”“コスト”“必要なエネルギーの量”の三つを総合的に評価する必要があります」と、バランスの重要性を話しました。

午後からは、実践発表として、参加者全員でエコたわし作り、鈴鹿市生活学校によるレジ袋削減寸劇、鳥羽市生活学校による生ゴミの堆肥化、久居生活学校による健康舞踊が行われました。

その他、参加者によるリフォーム、リサイクルの作品展示なども行われ、省資源・省エネルギーのために自分たちができることを再確認し、環境やリサイクルに対しての理解を深める場となりました。

講師略歴

主な業務経歴

ベンチャー企業立ち上げ業務

MATICSコンソーシアム(ICタグを用いたリサイクル促進)
バイオネットコンソーシアム(バイオガスの有効利用促進)

官公庁向け業務

ごみ焼却場、リサイクルプラザのPFIに関するアドバイザリ、可能性調査

民間向けコンサルティング

プラントメーカーの新規事業開発コンサルティング、
非木材資源(ケナフ)の 新規事業開発コンサルティング
他、CSR/SRI関係業務、環境・リサイクル関係の調査などを担当



三輪 泰史 (みわやすふみ)
株式会社日本総合研究所 研究員

学歴・職歴

2002年、東京大学農学部国際開発農学専修卒業
2004年、東京大学大学院農学生命科学研究科
農学国際専攻修了(農学修士)
2004年、株式会社日本総合研究所入社

講演録

平尾誠二さん、リーダーシップと組織づくりについて語る

21世紀のエネルギーを考える会・みえ協賛 平成18年度四日市商工会議所 優良勤労者表彰式で講演



今の社会の情勢をみると、環境問題が非常に大きくクローズアップされています。特にオイルの高騰や地球環境の破壊が懸念されていますが、日本は資源の無い国ですので、新エネルギーの開拓など、輸入しながらエネルギーを開発していかなければなりません。地球環境に優しい、環境と調和としたエネルギー情報を提供していきたいと思

います。」とあいさつしました。

冒頭で現代人の特徴として反発係数

の低下を挙げた平尾さんは、選手時代や元ラグビー日本代表監督の経験を交えたコーチング理論を展開し、「その人の持っているいいところを引き出す」、「その人のキャパシティを理解する」など、多様化している価値観を持った各人が集まったチームが、うまく機能するためのリーダーシップの取り方を語り、今後の強い組織づくりをするための、リーダーのあるべき姿を講演しました。

PROFILE 平尾 誠二 (ひらお せいじ)

神戸製鋼ラグビー部ゼネラルマネージャー(元ラグビー日本代表監督)

1963年京都生まれ。伏見工業高校時代に全国大会優勝。19歳で日本代表に選ばれる。同志社大学在学中は大学選手権大会3連覇に貢献。卒業後、1年間の英国留学を経て、1986年に神戸製鋼所に入社。入社3年目よりチームを7年連続日本一に導く。現役引退後は、日本代表監督を務め、W杯にチームを導く。

著書に『気付かせて動かす』『勝利のチームワーク』『知』のスピードが壁を破る』など多数。

11月7日、四日市市文化会館第2ホールにて、四日市商工会議所主催・平成18年度優良勤労者表彰式記念講演会(21世紀のエネルギーを考える会・みえ協賛)が、神戸製鋼ラグビー部ゼネラルマネージャーの平尾誠二さんを招き、「ラグビーに学ぶ、リーダーシップと強い組織づくり」と題した講演がありました。

講演に先立ち、中村事務局長が「昨

『フォーラム・エネルギーを考える』 四日市シンポジウム 開催

未来のために...みつめなおそう、エネルギーと地球環境

主催 Ⅰ『フォーラム・エネルギーを考える』

後援 Ⅰ四日市商工会議所、21世紀のエネルギーを考える会・みえ、中日新聞社

『フォーラム・エネルギーを考える』四日市シンポジウム“未来のために...みつめなおそう、エネルギーと地球環境”が2月21日(水)、四日市都ホテル「伊勢の間」で開催されました。

冒頭、21世紀のエネルギーを考える会・みえの小菅弘正会長が挨拶し、

「日本の経済は今やいざなぎ景気を超えて大変順調です。この好景気を支えているのは、エネルギーではないかと思えます。現在のところ、日本のエネルギーは順調に供給されていますが、今後はさまざまな課題が浮上してくると思えます。風力や太陽光などの新エネルギーも開発されていますが、出力の安定性、規模などを考慮すると、火力、水力、原子力には及びません。供給面の問題もさることながら、地球の温暖化の問題、これは影響が身近に感じられると思えます。今後、日本は冷静に原子力発電の必要性を考える時期が迫っていると思えます。我々がどのようにコンセンサスを得ていくか、21世紀のエネルギーの安定供給について考えていきたいと思えます。」と話しました。

パネリスト

神津 カンナ
作家

東洋英和女学院高等部卒業。ニューヨークのサラ・ローレンス・カレッジで演劇を学ぶ。帰国後第一作の「親離れするとき読む本」は、体験的家族論として注目されベストセラーとなる。執筆活動の他、テレビやラジオの出演や講演、公的機関や民間団体の審議委員など精力的に活動。様々な分野をクロスオーバーさせて問題提起する発言や文章は、豊かな感性と冷静な視点に支えられ、幅広い層から支持されている。著書に「美人女優」「あなたの弱さは幸せの力になる」など多数。

浅野 智恵美
環境カウンセラー、消費生活アドバイザー

愛知県豊田市在住。環境カウンセラー、消費生活アドバイザーとして、学校や自治体主催の環境講座を担当。環境問題に関する研究論文執筆、企業のステークホルダー会議などに携わる。環境教育や持続可能な循環社会形成の分野で、一市民の目線を活かした活動に取り組んでいる。省エネルギー普及指導員、あいち環境学習推進協議会委員、地球温暖化防止活動推進員を務めている。環境教育・普及啓発部門において、平成18年度地球温暖化防止活動環境大臣表彰を受賞。

が排出されるということが示され、世界的な原油高騰の現状を踏まえ、石油の輸入に頼るだけではなく、他のエネルギーにも目を向けていかなければいけないとしました。

また、身近にできる省エネとして、マイバッグ運動の推進や省エネ性能マーク(Eマーク)製品などの紹介がありました。世帯数が減らない限り家電製品なども増え、消費エネルギーも増えるという現状があり、人口は減っても日本のエネルギー消費が減ることにはならないと話し合われました。

新エネルギーについては、コストがかかったり供給量に限りがあるため、従来の火力や水力、原子力などとのバランスを保っていく必要があるとしました。原子力に対してはいまだに正しい情報が伝わっていないのが事実であり、正確な知識の啓蒙に努めていかなければならないということを確認しました。

その後、次世代を担う子どもたちへのエネルギー教育、環境教育の実践例の紹介があり、できることから実践していくことの大切さを再確認しました。

コーディネーター

木場 弘子
キャスター、千葉大学特命教授

千葉大学教育学部を卒業後、TBSに入社。在局中は女性スポーツキャスターの草分け的存在として、多数の番組を担当。1992年、中日ドラゴンズと田剛投手(現NHK解説者)との結婚を機にフリーとなる。現在は、妻、母、キャスターの三役をこなし、コーディネーター、講演や執筆活動など多方面で活躍。2001年、千葉大学教育学部非常勤講師、浦安市教育委員に就任。2005年より総合資源エネルギー調査会原子力部会の審議委員。2006年4月に千葉大学教育学部特命教授に就任した。著書に「子連れキャスター走る!」。

高レベル放射性廃棄物の処分に向けて

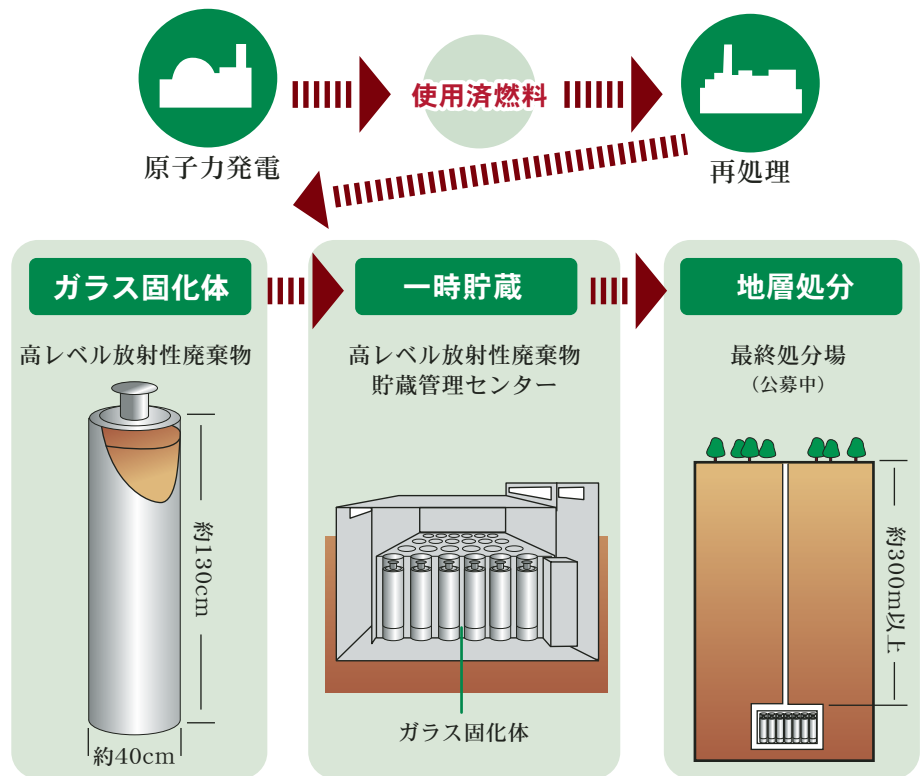
原子力発電を推進する上で、高レベル放射性廃棄物をいかに最終処分するかは、重要な課題の一つです。原子力発電所の使用済ウラン燃料を再処理すると高レベル放射性廃棄物が残ります。高レベル放射性廃棄物はガラス固化して、30～50年間程度冷却のため貯蔵し、その後地下300メートル以上の深い安定した地層中に最終処分することを基本方針としています。

原子力発電所で使い終わった使用済ウラン燃料から再処理により再利用の可能なウランとプルトニウムを回収しますが、これに伴って廃液が残ります。この廃液は放射能レベルが高いため「高レベル放射性廃棄物」と呼ばれています。

この高レベル放射性廃棄物をガラス原料と混ぜて溶かし合わせ、ステンレス製の容器(キャニスター)内で固めて安定な形態に固化処理し「ガラス固化体」にします。

ガラス固化体は、当初は放射能レベルが高くまた表面温度も高いことから、青森県六ヶ所村の「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」で30～50年間程度、一時的に冷却貯蔵されます。

その後、人間の生活環境に影響を及ぼさないよう、地下300メートルより深い安定した地層中に処分する予定としています。これを「地層処分」といいます。高レベル放射性廃棄物は、放射能レベルが十分低くなるまでには数万年かかり、人為的管理が困難です。このため、長期間にわたり高レベル放射性廃棄物を



高レベル放射性廃棄物の処理方法

人間の環境から安全に隔離する必要があります。隔離する方法としては、これまでに様々な方法が検討されてきましたが、地層処分が選ばれました。地下の深い場所では津波、台風等の自然災害に影響を受けず、戦争などの人間の行為による影響もうけにくいという特徴があり、また地層処分は地下水の流れが非常に遅い、酸素が少なく金属がさびにくいといった深い地下の環境に着目したものです。地層処分では、地下深くの安定した地層(天然バリア)に複数の人工障壁(人工バリア)を組み合わせる多重バリアにより、長期にわたり放射性物質を閉じ込め、人間の生活環境への影響を十分小さくすることとしています。

高レベル放射性廃棄物の最終処分に関しては1970年代から調査研究が進められています。2000年には、「特定放射性廃棄物の最終処分に關する法律(最終処分法)」が成立し、処理事業を行う「原子力発電環境整備機構(NUMO)」が設立されました。NUMOは2002年より最終処分場の候補地について全国の市町村を対象に公募しています。応募のあった地域について調査・選定が行われ最終処分場が決定されます。国およびNUMOは、地域の活性化につながるよう地域共生への取組を支援するとともに最終処分事業を計画的かつ確実に実施することとしています。

お知らせ

1 平成19年度総会のお知らせ

日時:平成19年6月5日(火) 13:00~16:00(予定)
会場:ホテルグリーンパーク津 伊勢の間

2 会員の募集

「考える会」では、会の更なる充実を図るため、引き続き会員の募集を行っています。

新世紀におけるエネルギー問題、環境問題等を共に考え、行動する人の「輪」を広げています。

未入会の企業、団体、一般の方で当会に興味がありましたら、一声お声掛けいただきますよう、お願いいたします。

編集後記

暮らしの中から考えよう、エネルギーと環境



事務局長
中村 信夫

会員の皆様方には、ご壮健で新しい新年を迎えられた事とご推察申し上げます。当会も温かいご支援に支えられ着実に目標に近づいている事を心から、御礼申し上げます。

産業や生活を革命的に変える原動力となったのは、電気である前世紀は「電気の世紀」と呼んでも良いくらいである、数々の発明が電気の恩恵によってもたらされた、人類も物質的に豊かな生活を実現したのであるが、しかしながら資源の枯渇、環境の悪化などの問題が深刻になったのではないだろうか。

最近の急激な原油高や、地球環境問題の高まりによって原子力発電に対する世界の潮流が転換されつつあります。

アメリカのスリーマイル、旧ソ連のチェルノブイリ事故を契機に一旦は原子力発電の廃止を云はれた事もありました。しかし、今や世界は新エネルギーの開発、原子力発電の必要性が認められつつあります。

さて、電気の文明を今後とも人類が享受していくためには、長期にわたって、安定的に電力を供給する方法を確立しなくてはなりません。さらに子供や孫に良い地球環境を残していくために、皆さん一人一人が暮らしの中から何が出来たかを考えていただき温暖化防止に、お力をお貸し下さい。

今後とも一層のご支援宜しくお願いいたします。

COVER Photo



たてさき
楯が崎(熊野市)

高さ70~100m、周囲約600mにおよぶ柱状節理(岩が柱のように見える)の大きな岸壁。初代天皇「神武」が本州に北上するとき、ここから上陸したともいわれている。甫母峠からの下り道のところどころから、二木島湾の入り口の楯が崎が見え隠れする。

写真は紀南地域写真コンテスト入賞作品
紀南地域活性化協議会提供

シンボルマーク



「みえ」のイニシャル「M」と自然のイメージをモチーフに、自然環境と暮らし、エネルギーの共生を表現しています。色は海のブルーと樹木のグリーン、図形は地球であり、「三重」の海と山、美しい海岸線でもあります。ダイナミックな「M」で、未来に向けて発展していくエネルギーの躍動感を表しました。

お問い合わせ先(事務局)

〒514-0004
津市栄町3丁目248番地
きりんセカンドビル302号
TEL&FAX(059)229-3790